Cotton Print Dress

1840年代のコットンドレス

2014.6.24（火）－ 7.29（火）

共立女子大学

神田一ツ橋キャンパス　本館1階展示室

東京都千代田区一ツ橋2-2-1　TEL　03-3237-2435

休館日 日曜・祝日　**時間** 9:30-17:30　※入場無料

東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄三田線・都営地下鉄新宿線「神保町」駅下車
A9出口から徒歩1分
東京メトロ東西線「竹橋」駅下車1b出口から徒歩3分

Cotton Print Dress

1840年代のコットンドレス

コットンドレスは、コットン生地などの織物製品（モスリン製品）生産の中心地イギリスの輸出品として1790年代頃からヨーロッパで流行し、その後の基本的ドレスとして定着した。特にフランスでは、フランス革命後にシルクやビロードの禁止令が発令されたため、コットンやリンネル生地のドレスが増加した。

この時代は、市民の消費による経済成長が促され、中産階級に新しいライフスタイルが生まれ、余暇を屋外で過ごすなどのレジャー文化誕生の時代でもあった。生活の快適性が求められ、洗濯の出来る更紗やコットン生地が好まれ、徐々に社会で働くようになった女性たちの服装にも相応しい素材として取り入れられる。こうした社会変化が最初に進んだのはイギリスだが、フランスでも印象派の画家たちの絵画に屋外で楽しむ男女の姿が描かれている。コットンドレスは近代化や女性の社会進出の象徴としても見ることができよう。

共立コレクションのコットンドレスは、服飾史で、「ロマンティックスタイル」と呼ばれる1840年代前後のものが中心である。ウェストで細く絞りペチコートを重ねて裾を大きく広げたスカートが特徴である。またパフスリーブや、それに細い長袖を組み合わせた袖のほかに、横に大きく広がったベレー型の袖、上部に詰め物をしたジゴ袖など、様々な形の袖が流行したのも特徴である。1840年代以後は、袖つけが狭まり、タイトな長袖や袖口で広がるパゴダ風の袖に変化していく。

このようなロマンティックスタイルを装ったのは、グリゼットと呼ばれる、可愛らしく装った娘たちで、縫い子、店の売り子、菓子屋の給仕、配達屋などの庶民の働く女性であり、19世紀の服飾文化の担い手として重要な存在となった。この展示が同時代のプリント生地のコレクションとともに木綿素材の服飾の歴史にふれる機会となれば幸いである。

参考例：「シルクプリントドレス」ドイツ　1845年

オーベルカンフ工場製　コットンプリント布地

1785～89年

1810年

1810年